

論文

『啓蒙の弁証法』の文化産業論と社会システム論
に基づくメディア文化の分析枠組みに関する考察伊藤高史[†]

要約：本稿は、テオドール・アドルノらの「文化産業」に関する論考の再検討を通じて、社会システム論に基づくメディア文化を理解するための分析枠組みに関する基本的な考え方を提示するものである。アドルノらの論考は、文化産業が、文化的作品と消費者（大衆）の双方に対して強い「画一化」の力を及ぼすことを批判的に論じたものであった。社会システム論に基づくならば、生産、流通、消費といった段階でのコミュニケーションによって構成される複数の社会システムが複合的に絡み合ったものとしてメディア文化（文化産業）を理解することになる。アドルノらの文化産業の過大評価を避けつつ、複合的な社会システム間の力関係に着目する視点を引き継ぐことが重要である。

キーワード：文化産業、メディア社会学、メディア文化、社会システム

目次

1. 本稿の目的と問題意識
2. アドルノらの文化産業論
3. アドルノらの文化産業論の再評価と現代のメディア研究
4. 受け手の主体性に関する研究
5. 文化産業論と社会システム論に基づくメディア文化の分析枠組み
 - 5-1. 社会システム論に基づくメディア文化（文化産業）の分析枠組み
 - 5-2. アドルノらの論考における「画一性」と社会システムの複合性
 - 5-3. アドルノらの論考における時間的な画一化と社会システム
6. 結語

1. 本稿の目的と問題意識

『SAGE 社会学事典』の「Mass Media」の項目では、マスメディアは「新聞、雑誌、ラジオ、手紙、映画、レコード音楽、そしてインターネットなどの、マス・コミュニケーションのあらゆる非対面的な媒体を意味する」（Bruce & Yearley 2006: 185）と説明されている。マス・コミュニケーションが、一対不特定多数のコミュニケーションを意

[†]同志社大学社会学部教授

*2020年7月8日受付、2020年7月9日掲載決定

味し、マスメディアがその道具であれば、インターネットがマスメディアでもあり得ることは明らかである。

インターネットの技術が一般化し、スマートフォンや SNS などのサービスが普及した今日では、誰でもがマスメディアを手にして気軽にマス・コミュニケーションに参加できる。その意味で今日は、「マス・コミュニケーション」「マスメディア」が全面化した時代である。不用意な SNS での発言が、「炎上」と呼ばれるような過剰な反応を生み出すこともある。しかしそうした「炎上」は、実際にはごく一部の人が行っているにすぎないことが知られている。こうしたことから、マス・コミュニケーションが全面化した今日にあっては、社会をひとつの塊（マス）ではなく、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの社会システム論が述べるように、様々な社会システムが複合的に結びついたものとして理解する必要性が増している。このようなことを筆者は、本誌の 2019 年 12 月発行号で主張した（伊藤 2019）。

筆者が研究領域とするメディア社会学との関連では、社会システム論に基づく「ジャーナリズム」へのアプローチは既に別稿で論じた（伊藤 2018）。本稿では、メディアを通じて伝播され消費される「娯楽」的コンテンツの創造と消費によって形成されるメディア文化について、社会システム論がいかにして論じることができるのかを考察する。特に、メディア文化に関する一つの古典的な論考との対比において、社会システム論に基づく分析枠組みの基本的考え方を提示することを試みる。その古典的な論考とは、ドイツの哲学者テオドル・アドルノが、マックス・ホルクハイマーとともに著した『啓蒙の弁証法』の中で展開した「文化産業」についての論考である（Horkheimer & Adorno＝徳永恂 1944 [2004]＝2007）。その第 4 章は「文化産業：大衆欺瞞としての啓蒙」と題されており、ホルクハイマーとの共著ではあるが、アドルノの主導によって執筆されたと考えられている（細見 1996：138）。このため本稿では上記の論考を「アドルノらの論考」「アドルノらの文化産業論」などと表記する。ルーマンの社会システム論は難解なことで知られている。本稿がアドルノらの論考との対比において社会システム論に基づく分析枠組みの基本的考え方を示そうとするのは、要点を明確に示すための便宜を考えてのことである。

アドルノは『啓蒙の弁証法』以外にも、音楽を中心に、大衆文化や文化産業について論じている（例えば、Adorno＝高辻・渡辺 1962＝1999）。本稿で『啓蒙の弁証法』の文化産業論に的を絞るのは、同書が古典的な名著として知られていることに加えて、他の論考を捨象することで本稿での主張を明確に提示するためである。「アドルノ研究」であればこのようなことは許されないであろう。しかし、アドルノらの論考を利用して社会システム論に基づいた分析枠組みの基本的考え方を提示するという本稿の目的に照らせば、妥当な措置であると考えている。

メディア文化として我々が触れることのできるものは多かれ少なかれ、個人の才能や思想の表現としての側面を持つ。そうした個人の才能や思想の表現としてのメディア文化的産物（作品、コンテンツ）は、誰でもが一对不特定多数への情報発信という意味でのマス・コミュニケーションに参加できる状況となり、より一層、「産業」として経済活動の過程に組み込まれるようになっていく。現在では、素人が様々なコンテンツを SNS や Youtube など発信しているが、そこには広告がつけられている場合が少なくない。あるいは単純な検索も、個人情報収集した経済活動に利用されている。この意味で、メディア文化を文化産業という観点から捉えることの意義は、マス・コミュニケーションが全面化した今日にあって一層重要性を増していると言える。

文化産業は現代社会に生きる者に、様々な形で極めて重要な影響を与えている。数分間の音楽が、自分の人生の在り方を決めるにあたり、決定的に重要な役割を果たしたとの記憶を持っている人も少なくないに違いない。しかし、文化産業が個別の人に与える個別の影響ではなく、よりマクロな視点から文化産業が現代社会に果たす影響を考えようとすると、その影響の大きさにもかかわらず論じることが困難であるように思う。恐らくその理由のひとつは、文化産業の影響が広範囲に広がりすぎており、その全容が掴みにくいからであろう。

それゆえ、メディアという観点を手がかりにして社会の在り方を捉えようとする「メディア社会学」にとっては、文化産業の在り方とその影響を捉える視点を提供することは、大きな課題であり、挑戦となる。

本稿ではまず、アドルノらの文化産業についての議論を概観し、彼らの議論の中心が、文化産業によってつくられる作品とそれを受容する大衆の「画一化」にあることを確認する。そして、近年の日本のメディア研究に関わる文脈でアドルノを再検討しているいくつかの事例を紹介し、さらに、アドルノらの主張に対する典型的な反論であろう、受け手の主体性についての議論に言及する。その上で、アドルノらの論考との比較においてメディア文化を分析するための社会システム論的な分析枠組みの基本的な考え方を提示し、アドルノらの論考をどのように取り込み、また乗り越えることができるのかを検討する。

2. アドルノらの文化産業論

アドルノらの論考では冒頭近くで、「今日では文化がすべてに類似性という焼印を押す」と指摘されている（Horkheimer & Adorno＝徳永 1944 [2004]＝2007: 128＝251）。筆者の理解では、文化産業が互いに類似（画一化）した文化的作品（製品）をつくりだし、受け手（大衆、消費者）に「画一化」の傾向をもたらしていることへの批判が、彼

らの論考の中心的論点である。

文化産業が提供する作品（製品）が画一化していく様については次のように説明される。映画、ラジオ、雑誌といった当時のマスメディアは一つのシステムを構成する。そのようなマスメディアを通じて文化産業が提供する作品は、無数の場所で同じ需要に応えるためにつくられた「規格製品」である。経営者は需要に応えるために組織と計画を強化する。「操作する側と、それと連動する視聴者側の要求とは循環しているので、そのサイクルの中で、システムの統一はますます緊密の度を加えていく」のである。文化産業のシステムを支える聴衆はシステムの一部となる。経営者の側は、彼らの消費者像に合わないものは何一つ作らないという点で一致している（ibid. : 128-130=251-255）。規格化された作品（製品）は「しょせんいつも同じものでしかない」のであり、どのような映画であっても「たいして代り映えしない」。メディアも「飽くことなき画一性へと駆り立てられている」。「文化産業製品の同一性は、明日にも公然と凱歌を揚げかねまじき勢いにある」という（ibid. : 131-132=257-258）。

文化産業が消費者に提供する作品は、文化産業によって一定の図式のもとに規格化されたものとなる（ibid. : 133=259）。そうした規格化された作品は消費者を画一化していく。そのことについては、例えば次のように説明される。

産業社会の持つ暴力は、常に人間の心の奥底まで力を及ぼしている。文化産業の諸製品は、人が気を散らしている時でさえ、さかんに消費されるのを当てにすることができる。しかし一つ一つの製品をとって見れば、それはすべての人を、労働している時も、それと代わり映えしない余暇の間にも、息つく間もなく駆り立てている経済的巨大大機械装置のモデルなのである。どんなトーキー、どんなラジオ番組をとって見ても、（独占）社会にあっては、影響を受けるのは個々人ではなくて、皆一緒なのだということが察知される。文化産業が提供する製品の一つ一つは、否応なしに全文化産業が当てはめようとしてきた型通りの人間を再生産する（ibid. : 135=263-264）。

もちろん、様々な芸術はそれぞれ固有の様式を持っている。しかし、このような様式は、文化産業が生み出す画一性とは異なる。というのも、本来の芸術の様式というのは、「不一致がそこに現れる様相のうちに、つまり同一性への情熱的な努力の必然的な挫折のうちにこそ」現れるものだからである。「偉大な芸術作品の様式が、昔から自己を否定してきたこの挫折に身を曝すのに対して、薄弱な作品は、いつも他の作品との類似性に、同一性の代用物にしがみついてきた。ついには文化産業がイミテーションを絶対化する」。アドルノらはこのように述べて、芸術本来の在り方と、文化産業を区別するのである（ibid. : 139=271）。

アドルノらが描く一般大衆あるいは消費者は、徹底的に主体性を失い、客体化された存在である。産業化された社会では、文化産業によって提供される娯楽の消費は労働の

延長である。娯楽とは、「機械化された労働過程を回避しようと思う者が、そういう労働過程に新たに耐えるために、欲しがるもの」なのである (ibid. : 145=282)。消費者は文化産業の客体に過ぎない (ibid. : 150=291-292)。産業は人間に対して、自分の客か従業員としてしか関心を抱かない。そして次のように指摘する。

従業員としては、人々は、合理的組織の一員であることを忘れないようにしつけられ、その組織に健全な常識をもって順応するように縛りつけられる。お客としては、彼らには、人間的・私的出来事に関して選択の自由が、捕らわれてはいないというそそのかしが、スクリーンの上でも新聞紙上でも喧伝される。どちらの場合にせよ彼らはしよせん客体にすぎない (ibid. : 155=301)。

客体化され、画一化された大衆は、秩序に従うように義務付けられていく (ibid. : 161=312)。個性は消滅し、文化産業のうちで個人は幻影と化す。個人は一般的なものと同一化する限りにおいて容認される。ジャズのような一見個性的に見える即興演奏も規格化されたものに過ぎず、文化産業にはびこるのは「疑似個性」である。個人は、「たんに一般者の持つ諸傾向の交流する結び目にすぎない」 (ibid. : 163-164=315-316)。個性が失われ、社会は崩壊する。このような文化産業は、ファシズムの政治体制とも親和的である。ファシズムは、文化産業によって提供される作品をどん欲に消費する人々を、「正真正銘の強制服従のうちへ再編成することを望んでいる」のである (ibid. : 170=328)。

資本主義社会では、確かに消費者に選択の自由がある。しかしそれは、与えられたものの中での選択の自由である。アドルノらの論考の終わり付近では次のように述べられている。

宗教が歴史上中性化して以来というもの、誰だって自由に無数の宗派のどれかに加入できるように、誰だって自由に踊ったり享楽にふけったりする自由を持っている。しかし常に経済的強制を反射しているイデオロギー選択の自由は、どの分野においても常に同一なもの (das Immergleichen) への自由でしかないことが判明する。 (ibid. : 176=337-338)

このように、『啓蒙の弁証法』において、アドルノらは一貫して「文化産業」を画一化という観点から批判的に捉えている。このようなアドルノらの論考はその時代的な制約の下に置かれているのは当然である。彼らの議論は、いまだテレビすら普及していない時代のものであり、また、ドイツのファシズム政権崩壊前のものであった。

ただし、次の点は指摘しておくべきであろう。アドルノらの論考は、資本主義が進展し、マスメディアが発達し、多様な文化が花開くなかで、そうした「多様」に見える概観の背後に、「画一化」が進んでいることを指摘したものである。このことは、論考の冒頭において彼らが、宗教の根拠の喪失や、前資本主義的残滓の解体、技術的・社会的

な分化と専門化によって文化的混沌（カオス）がもたらされたという「社会学的見解」を、「ありふれた嘘」と指摘して議論を始めていることに端的に表れている（ibid. : 128 = 251）。つまり、アドルノらは、多様化へと向かう文化の趨勢を認識していなかったわけではない。むしろ、表面的に進行する多様化の背後で進行する「画一性」の存在を指摘しようとしたのだということは認識しておくべきであろう。

今日の大衆文化を語る上でも、「画一化」の傾向が全く存在しないわけではない。例えば西洋のいわゆるクラシック音楽の歴史を概観した著書を著した岡田暁生は、19世紀に西洋音楽は「市民を感動させる」という点で共通性を帯びたものとなり（岡田 2005 : 167-169）、20世紀のポピュラー音楽はそのような「感動させる音楽」の後継者であることを、アドルノに言及しつつ次のように指摘している。

時代の先端を行くと自負する現代音楽の作曲家たちもまた、過去の西洋音楽に多くを負っている。彼らはいまだに五線譜を使ってオーケストラやピアノのための「作品」を書き、コンサートホールで上演する。彼らの作品で頻出する絶叫や痙攣^{けいれん}や苦悩や瞑想のポーズなども、ロマン派から受け継がれたステレオタイプな身振りだ。その新奇な音響や作曲家自身による難解な解説はともかく、記譜法やそこからおのずと規定されてくる音システム、あるいは美学や制度の点では、現代音楽は意外にもかなり保守的だとすらいえるかもしれない。同様にポピュラー音楽の多くもまた、見かけほど現代的ではないと私には思える。アドルノはポピュラー音楽を皮肉を込めて「常^{エヴァー}緑^{グリーン}樹」と呼んだが（常に新しく見えるが、常に同じものだという意味だろう）、実際それは今なお「ドミノ」といった伝統的な和音で伴奏され、ドレミの音階で作られた旋律を、心を込めてエスプレシーヴォで歌い、人々の感動を消費し尽くそうとしている。ポピュラー音楽こそ、「感動させる音楽」としてのロマン派の、20世紀以降における忠実な継承者である。（同上 : 228-229）

岡田はこのように、西洋のクラシック音楽と現代の音楽、特にポピュラー音楽との同質性を強調している。確かにドレミという音階をつかっているなどの点では、現代のポピュラー音楽のほとんどは「画一化されている」という評価もできないわけではなかろう。アドルノらの文化産業論は、多様化の一方で進む「画一化」の側面に我々の関心を向けるという点では今日においても意味があるのかもしれない。しかし、画一化の側面ばかりを強調するならば、我々が日々経験している「多様な」メディア文化の在り方を的確に理解することにはつながらない。メディア文化の今日的在り方をよりの確に理解しようとするならば、画一化と多様化の双方の面をバランスよく観察できるような社会理論が必要であるのではないだろうか。

3. アドルノらの文化産業論の再評価と現代のメディア研究

上記のようなアドルノらの分析は、現代人から見ると、ずいぶんと時代遅れで、的外れなものに見えるのではないだろうか。一般の人々が、文化産業を通じて、資本主義経済に従属するように強いられているといわれても、それに納得できる人は少ないだろう。しかし、アドルノらの議論は今日でも繰り返し参照されている。社会システム論の観点からアドルノらの論考を批判的に検討する前に、今日のメディア文化を論じる者がどのような関心を持ってアドルノらに接しているのかを一瞥しておきたい。

社会学者としてアドルノを捉えた著書を著し、またメディア文化をテーマにした著書もある片上平二郎は、文化産業の「潜在的可能性については肯定的なアドルノの思想というイメージ」を取り出すことを試みている（片上 2018:131）。アドルノは文化産業としての「娯楽」を批判するとき、その「軽さ」や「楽しさ」を批判したのではなく、「娯楽」の名の下で多様な楽しみを排除するような「狭量さ」を批判しようとしたのである（同上:128-129）。アドルノの思想にはむしろ、「楽しさ」の可能性の追求という方向性が見える。アドルノは、文化産業の複製技術の可能性についても批判の目を向けて、その意味での保守性にも注目されてきた。しかし、アドルノは一元的に技術を批判したのではなく、その使われ方の問題に注意を向けたのである（同上:130）。片上はどのように論じて、「楽しいアドルノ」というイメージを提示するのである。

あるいは、社会学的側面からポピュラー音楽について論じる小川博司は、アドルノの『音楽社会学序説』などを検討しつつ、「アドルノのポピュラー音楽研究をとりわけ現代社会におけるノリの先行研究として位置づけ」という視点を提示している（小川 2016:1）。小川は、アドルノが「受動的な聴取者像」という視点に拘りながらも、「20世紀の前半に音楽に起こった新しい現象を的確に観察していた」と指摘する（同上:9）。アドルノは「受動的な聴取者像」として、「リズム従属型」と「情緒型」の2類型を提示した。「リズム従属型」は、ダンスホールに集まり一緒に踊るようなタイプであり、「情緒型」とは、音楽の全体よりも一部を聞いて、開放感やリラクセスを味わうようなものである。小川が論じる「ノリ」との関連では、前者は「集団的なノリ」であり、このとき音楽のメディアは人々を同じ空間に集める方向に作用する。これに対して後者は個人で楽しむ「一人だけのノリ」であり、音楽のメディアは人々を孤立させる方向に作用する。アドルノが提示したこの2類型は、「集団的なノリだけでなく一人だけのノリも考慮すべきであることを示唆している」と小川は指摘する（同上:15）。

大衆文化の社会学的分析に関する多くの著述のある毛利嘉孝も、アドルノらを再評価している。毛利は特に、アドルノらの「娯楽の消費は労働の一部である」という指摘の

今日的な重要性を指摘している（毛利 2012）。例えばポピュラー音楽を例にとってみると、人々の音楽的嗜好は画一化ではなく多様化している。このような変化は「労働や余暇、資本の大きな変化」の中で起こったと毛利は指摘する。既に述べたように、アドルノは、文化産業の消費は労働の延長であることを指摘した。ミュージシャンをはじめとする音楽産業に従事する労働者たちの労働は、決められた時間に職場に出勤して、決まりきった作業を行うようなかつての工場労働者たちの労働とは対極的にある。後者は大量生産・大量消費という資本主義の発展段階における典型的労働スタイルであり、それはしばしば「フォードイズム」という言葉で表現される。しかし資本主義経済が発達、成熟し、「後期資本主義」とも呼ばれる経済状況になると、画一的な商品を大量に生産、販売するというモデルは通用しなくなる。後期資本主義の段階においては、多様な製品を、多様な消費者の嗜好に合わせて提供することが求められる。つまり、大量生産・大量消費の原則という初期の資本主義の原則は、後期資本主義の段階には少量生産・少量消費という原則にとって代わられるのである。そのような少量生産・少量消費の時代にあつては、労働スタイルも変化する。すなわち、そこでは画一性よりも多様性、個性が求められるのである。これらの労働スタイルは「ポストフォードイズム」と表現される。そして、音楽産業に従事する労働者たちの働き方は「ポストフォードイズムの」労働の典型である。「彼らの多くは労働と余暇の区分は存在せず、その区分のどちらにも属さない創造的な活動が存在しているだけです」と毛利は述べる。しかしこの場合の「創造的」は、文化産業が発展する前の芸術家が「創造的」であったのとは意味が違う。というのも、現代の音楽産業に従事する者の創造性は、文化産業発達前とは異なり、「100% 経済活動に結びついている」からである。そして、この「ポストフォードイズム」的な生産様式において決定的に変化したのは、この創造的な活動が、「あらゆる労働の理想的なモデルになったこと」であるという（毛利 2012 : 74-80）。毛利は次のように続ける。

かつては労働のカテゴリーからは周縁化されていた芸術的な営為が、労働の活動の中心的なモデルになったのです。たとえば、日常は単調で反復的な労働をしているミュージシャン志望の若者が、「今いる場所が本来自分のいる場所ではない」と感じるのは、労働から逃れて自分の好きなことをしたい、のではなく、むしろ自分に適した創造的な労働をしたいと願うからではないでしょうか。ここにおいて、余暇を含むあらゆる創造的な活動は労働に、そして芸術活動を含むすべての生産活動は資本主義のダイナミズムに包摂されていきます（毛利 2012 : 80-81, 傍点ママ）。

毛利はこのような分析を披露した上で、アドルノらが資本主義社会において娯楽が労働の延長であることを予言していたことに言及している。彼らは、娯楽が労働の延長であることを理解しつつも、資本主義が発達した段階では、「労働の概念自体が産業構造

の変化とともに変わってしまった」ということを理解していなかった。この意味で、アドルノらの予言は「半分しかあたっていないといえるかもしれません」と毛利は指摘している（同上：81）。

このように、アドルノらの文化産業論は、今日のメディア文化の社会学的分析に示唆を与え続けている。しかしながら、上記のいずれの論者も、アドルノらが中心的に論じた「画一化」の傾向とは別の論点にその可能性を見出そうとしているように思える。確かに、アドルノらの思想を今日に引き継ぐという問題関心に立てば、アドルノらがあまり論じなかった点に着目するような議論もあり得るだろう。しかし、上記の3人の論者のアドルノへの再評価は、やはりアドルノらの論考は、その中心的な論点においてはもはや「時代遅れ」で論じるに値するものでないという評価の裏返しのようにも思える。筆者は、アドルノらの議論を復活させるよりも、彼らが文化産業の可能性を十分に把握できなかった理由を社会システム論の観点から検討することで、その論考をさらなる理論研究の発展のために利用したい。しかしそのような議論に向かう前に、メディア社会学の中で、メディア文化の受け手（一般市民、消費者）の主体性を強調する議論を参照しておきたい。受け手の主体性を強調することこそが、アドルノらの論考に対する最も単純であると同時に説得的な批判であると考えからである。

4. 受け手の主体性に関する研究

アドルノらの議論の欠点としてすぐに思いつく点は、メディア文化の受け手の能力を軽視した点である。実際に、メディア研究の文脈においても、受け手の側の解釈の多様性を指摘する研究が数多くなされてきた。代表的なものが、スチュアート・ホールによる、「エンコーディング・デコーディング」というモデルである。情報の送り手は、特定の情報を特定のコードに則って加工し、それを情報の受け手に届けようとする。しかし、情報の受け手は独自の規則に則ってその情報を解釈する。ただし、情報の送り手は情報をコードに則って加工する際に、「優先的な読み」を提示することができるため、送り手と受け手は対等ではない。こうしたことが論じられた（Hall 1980 : 128-138）。

情報の送り手はなんであれ、何らかの情報を伝えるときに特定の規則（コード）に則って加工し、また、受け手はそれを独自の方法で解釈するということは当然のことである。こうした一見当然のことが広く論じられたことの背景には、アドルノの議論に代表されるような、送り手側である資本家やテレビ局などの従来のマスメディア組織の圧倒的な影響力に関する認識があったためであろう。しかし、送り手が多様化した今日にあっては、あえて「エンコーディングとデコーディング」という過程の存在について強調する必要はないように思う。

同じように、受け手の解釈の自律性を強調した議論として有名なのは、ジョン・フィスクの一連の論考である。例えばフィスクは、マルクス主義者やフェミニストによる研究がしばしば、様々な形で服従を強いられる民衆の「日常実践を無視したり、ばかしくしたり」といった傾向を持っていることを指摘する。それらは民衆を擁護し、より多くの諸権利を与えるべきだと論じているにもかかわらず、「民衆を軽蔑するか、すくなくとも見下すことになってしまっている」のだという（Fiske=山本 1989 [2011]=1998: 26-27=56-57）。そして、こうしたことは「ポピュラーカルチャーの研究にもいえる」と述べて次のように続けている。

たとえポピュラーカルチャーに対してかならずしも悲観的・否定的な見かたはしていないとしても、ポピュラー・テキストの型どおりの機能だけを強調することによって、結果的に権限をもたない民衆の能力、すなわち産業界によって製造され、販売された文化的資源を利用して自分たちなりのポピュラーカルチャーをつくりだす能力をはじめからないものと考えたり、見て見ぬふりをするが多かった。（ibid.: 27=57, 傍点ママ）

そして、自身のポピュラーカルチャーに対する態度を次のように明示している。

ポピュラーカルチャーは従属的立場の者たちによって自分たち自身のためにつくりだされるものである。くりかえしになるが、その素材は逆説的なことに支配層の経済的利益のためにつくられたものを利用する。いいかえれば、ポピュラーカルチャーは体制の内側から、しかも底辺から生み出されるものであり、大衆文化（mass culture）の理論家が考えるように、外部から、あるいは上から押しつけられるものではない。そして、ポピュラーカルチャーには社会統制からはずれる要素がつねに含まれており、それによってヘゲモニー的な圧力をのがれたり、その圧力に対抗したりしている。ポピュラーカルチャーはつねに対抗文化なのである。ポピュラーカルチャーの内部では、支配的イデオロギーに反して、従属的立場にいる者たちが自分たちのための社会的意味を生み出す努力がつねになされているわけだ。たとえ一時的で限定的な勝利であったとしても、この努力を成功させることが民衆にとっての快楽であり、民衆の快楽がつねに社会的・政治的な色彩をおびているのはそのためである。（ibid.: 2=9-10）

メディア文化の受け手（消費者）が、送り手の意図する通りに情報を受け取っているわけではなく、また、そうした受け手自身に新しい文化を創造する能力がないわけではないことは改めて指摘する必要はないだろう。今日のように、インターネットやスマートフォンが普及して、誰でもが容易に不特定多数への情報発信（マス・コミュニケーション）を実践できる今日にあっては、このことは一層明らかである。フィスクのような主張が意味を持つのは、むしろ、文化産業が日々、我々に強い影響を及ぼしている、という前提を認識するからであると考えべきではないか。文化産業が非常に強い影響を持ってその消費者に作用するからこそ、そこでの「抵抗」に注目する意味があるのであ

る。

実際にフィスク自身も、あるシンポジウムでの質問に対して、自分の研究が「快樂」を強調し過ぎたと述べ、その背景として、自分も含めた左派の学者たちが、「あまりにも長い間、ポピュラーカルチャーを理解するための鍵となる概念としてイデオロギー的あるいはヘゲモニー的实践を強調してきました」と述べている。この場合の「快樂」とは、支配勢力に対抗して解釈をする「快樂」であり、また、「意味創出」に関与し、生産するという「快樂」である (ibid.: 148-149=284-286)。

フィスクが「快樂」を強調するのも、文化産業の提供と消費が権力関係に関わるという根本的な認識があつてのことである。彼は上記の引用個所に続けて、「わたしは民衆的快樂を、権力をつつみこんだ諸装置と社会的弱者に独自の社会経験との境界面に発生するものとして理論化したい」と述べている (ibid.: 149=285)。そして、フィスクのような研究が、資本家が支配する文化産業の送り手側の力を過度に強調する中で構築されたものであるならば、誰でもがパソコンやスマートフォンなどを利用して、簡単に文化的創造と不特定多数への伝達 (マス・コミュニケーション) の過程に参加できる時代にあつては、再び、「文化産業」の送り手側の力を把握するための努力がなされるべきであると考ええる。

5. 文化産業論と社会システム論に基づくメディア文化の分析枠組み

これまでの議論を踏まえて、アドルノらの論考を批判的に考察することを通じて、ルーマンの社会システム論に基づいたメディア文化 (あるいは文化産業) の分析枠組みの基本的な考え方を提示したい。ルーマンの社会システム論は抽象度が高く、そのままでは実際の社会の在り方を分析する道具として利用するには困難であるように思える。しかしながら、彼が提示したいくつかのアイデアは、現実の社会を分析する上で非常に有意義な示唆を与えてくれると考える。

5-1. 社会システム論に基づくメディア文化 (文化産業) の分析枠組み

社会システム論においては、社会システムを構成する最小単位はコミュニケーションであり、コミュニケーションの連鎖が社会システムを構築する (Luhmann=佐藤 1987 [2015]=1993: 192=216)。社会システムは「観察」によって、社会システムにとって意味あるものとそうでないものを区別し、自らを「環境」から区別する (ibid.: 35=24)。そして、社会は、社会システムが「複合的に」結びついたものとして存在する。ある社会システムにとって環境として存在するものの中には、別の社会システムが存在し、特定の社会システムにとって特に密接に関係する社会システムは「相互浸透」ある

いは「構造的カップリング」の状態に置かれ、相互に独立しつつも、相互に影響を与えあう (ibid. : 286-345 = 331-403)。

社会システムがコミュニケーションの連鎖によって構成されるものであり、観察によって自らを環境から社会システムとして区別するようなものであるとすると、何をもって「社会システム」というかは非常にあいまいになる。それは必ずしも法制度のような客観的に存在するものによってつくられたものではない。社会システムとして想定されるのは、友人関係のようなミクロなものから、国家権力によって制度化された司法のシステムや、国会議員ら権力者によって構成される権力システムといったよりマクロなものまで様々である。

このように考えると、社会システムは極めてあいまいな概念となり、社会を分析する道具として十分に役立つものであるのか、疑問に思えてくるかもしれない。社会システムという概念は、社会の在り方を考える上での何らかの発見を、分析する者、あるいはその分析に触れる者に与えるためのものであると考えれば、何をもって社会システムと捉えるかは専ら分析者の主観によるものとなる。それが主観によるものでありながらも、客観的な社会の分析に利用できるかどうかは、実際に分析の結果が説得的なものになるかどうか依存してくると言えるだろう。

アドルノらの議論では、資本主義というメカニズムがメディア文化全体に画一化の効果をもたらしたり、消費者の欲望の生産と管理を行ったりしていると想定されている。つまり、主語はあくまで資本主義となる。これは、彼らがマルクス主義に強い影響を受けていたからであろう。

社会システムがコミュニケーションを最小単位として構成されると考えるならば、資本主義が社会を画一化するといったように、資本主義を主語とした記述は妥当ではない。コミュニケーションの連鎖として社会システムがつくられる以上、どのようなコミュニケーションが特定の社会システムを構築するのかを見極めることが重要な作業になる。

ルーマンの社会システム論にあつては、社会システムの最小単位はコミュニケーションであつて個人ではない。しかし、社会の具体的な分析に社会システム論を応用しようとするれば、具体的なアクター（行為者）を想定し、そうした行為者の相互行為やコミュニケーションを起点にどのような社会システムを想定できるかを考えざるを得ない。

このように考えたときに、メディア文化産業に関わる社会システムを、生産・流通・消費という観点から考えてみよう。生産の過程にかかわる社会システムは、音楽家や作家などのクリエイターなどによって行われるコミュニケーションによって構成される。流通の過程にかかわる社会システムは、テレビ局や出版社などのメディア関係者を中心に行われるコミュニケーションによって構成される。消費の過程に関わる社会システム

は、消費者同士のコミュニケーションを中心にして社会システムが形成されていると想定することができるであろう。もちろん、これは社会システムという観点から見た分類である。具体的な個人を見れば、例えば映画やテレビ番組のプロデューサーは生産にも流通にも消費にもかかわっている。つまり、彼らが生産の過程にかかわる社会システムに関与することもあれば、流通の過程にかかわる社会システムに関与することも、消費の過程にかかわる社会システムに関与することもある。

アドルノは資本主義が作品（作り手）と消費者（受け手）の双方の画一化をもたらすと考えたが、文化産業との関連では、資本主義とは主に流通の社会システムと考えることができる。というのも、文化産業において、少なくとも過去においては中心的役割を果たしてきたテレビ局のようなマスメディア組織は、「メディア」という言葉が示す通り、情報を媒介することが本来的な機能であったからである。テレビ局などの伝統的なマスメディア組織を、インターネットなどの比較的新しい「マスメディア」と区別して「旧マスメディア組織」と表現すれば、旧マスメディア組織は確かに、生産にも深くかわり、生産の現場をも支配していることも少なくない。しかしそうした力を旧マスメディア組織が持つのは、情報の流過程を掌握していたからにほかならない。そして、マス・コミュニケーションが全面化した今日にあっては、そうした彼らの権力基盤が崩れようとしている。これに対してアドルノらが想定したのは、流通を支配する旧マスメディア組織を中心に構成される流過程の社会システムの圧倒的な支配力であった。

流過程の社会システムは一方ではアーティストなどの生産者（クリエイター）によって形成される生産過程の社会システムを観察し、新しい才能を探し、その一方で、消費過程の社会システムを観察し、何が求められているのかを知ろうとするだろう。これに対して、生産過程の社会システムは流過程と消費過程の社会システムを観察し、何が売れて何が売れなくなるのかを判断するだろう。消費過程の社会システムは生産過程と流過程の社会システムを観察し、おもしろいものを探そうとする。つまり、流過程、生産過程、消費過程の3つの社会システムを想定すると、1つの社会システムにとって他の2つの社会システムが「環境」の重要要素となる。生産と流通と消費という3つの過程の社会システムは、様々に機能分化した社会システムが複合的に結びついたものであるが、それぞれは相互に密接に関係し合う構造的カップリングの状態にあると考えることができる。

そして3つの社会システムはそれぞれの環境を観察し、自らの意味の体系（価値体系）に従って解釈し、その意味の体系によって「有意」とされた情報を取り込み、コミュニケーションの連鎖を続ける。3つの社会システムは複合的に絡み合い、相互に影響し合うが、それぞれは別の論理に従って動く。先に受け手の主体性を強調するフィスク

らの議論を検討した。消費過程の社会システムは、生産、流通過程の社会システムから強い影響を受けるとしても、その間には一定のズレが存在するのである。社会を、複数の社会システムが複合的に絡み合ったものとして捉えるということは、このようなズレの存在を重視することにほかならない。

以上のような社会システム論の観点からは、アドルノらの所論はどのようなものとして理解できるかを次に考察してゆこう。

5-2. アドルノらの論考における「画一性」と社会システムの複合性

アドルノらの議論のポイントは、文化産業が、文化的産物（作品）とその受け手である大衆一般に対して、画一化の作用をもたらすということであった。このことはつまり、文化産業が圧倒的に強い力で、社会を全面的に支配していると理解することである。「全世界が文化産業のフィルターをつうじて統率される。」(Horkheimer & Adorno = 徳永 1944 [2004] = 2007: 134 = 262)、こうアドルノらは考えるのである。

社会システム論の立場から文化産業を理解しようとすれば、文化産業が生産も消費も完全にコントロールしてしまうような理論モデルからは離れなければならない。生産、流通、消費のそれぞれの過程で観察できる社会システムが複合的に絡み合い、相互に独立しつつも影響を与え合うようなものとして、メディア文化あるいは文化産業をイメージすることが必要である。アドルノらの議論は、旧マスメディア組織を中心としたコミュニケーションによって構成される流通過程の社会システム（文化産業システム）の、他の社会システムへの圧倒的な影響力を指摘したものと理解できるのであるが、文化産業が彼らの時代から大きく発達した今日にあっては、旧マスメディア組織を中心に構成される社会システムの力を抜本的に相対化して捉えることが必要になるのである。マス・コミュニケーションの過程が、かつてはそれを独占していた旧マスメディア組織の手から解放され、個人個人がスマートフォンなどを通じて気軽にその過程に参加できる今日にあっては、メディア文化を構成する社会システムの複合性は一層複雑なものとなっていると考えることができるからである。

ただし、アドルノらの文化産業論からいかに学べるかという問題意識に立てば、次のことを指摘しておかなければならない。つまり、アドルノらの論考は、社会を複数の社会システムが複合的に組み合わさったものとして理解しようとするとき、社会システム間の「力関係」に着目したものであり、このような視点は、社会を具体的に分析するために社会システム論を利用しようとする際には決定的に重要な視点となるということである。

社会が、複数の社会システムが複合的に組み合わさったものとして理解できるとしても、各システムはただ並列的に並んで存在しているものとして社会をイメージすること

はできない。社会は本来的に力関係（権力関係）によって一定の秩序を保つものだからである。社会理論の概説書を著したアレックス・カリニコスは、過去 200 年の間に発展してきた社会理論は、主に次の 3 つの次元、すなわち、資本主義的な市場システム、イデオロギー、政治支配の諸形態という次元から、社会の権力・経済関係を考察してきたと、その著書の冒頭で述べている。社会理論を語るときに、「権力」や支配といった問題は、経済と並んで不可欠の要素なのである（Callinicos 2007: 1）。

このような力関係への着目は、アドルノらの論考から引き継ぐべき部分である。旧マスメディア組織にしても、技術的な進歩の中で自らの力の根拠が掘り崩されて行く中で、その技術の流れにただ身を任せているわけではない。新しい技術的变化の動向にあわせて、他の社会システムを支配下に置くべく闘争している過程にあると捉えた方が、より実態に合ったものの見方となるであろう。

5-3. アドルノらの論考における時間的な画一化と社会システム

アドルノらの議論が文化産業における「画一化」を厳しく批判するものであることは既に述べた通りであるが、彼らの批判が「時間的」な意味においても「画一化」を批判していることに注意すべきである。つまり、同時代的に提供される様々な表現が画一化されているだけでなく、過去の作品と比べてもそれは「同一化」の傾向にある、ということである。アドルノは、「買い手の画一主義は、常に同じものの再生産に安住する」と述べ、「常に同じだということは、また過ぎ去ったものへの関係をも規定している」と指摘する。つまり、常に同じであるということ（不変性）は、新しいものが生み出されないということである。「後期自由主義段階に対する大衆文化段階の新しさは、新しさを排除する所にある」のである。文化産業は機械的に新しい作品を生産するのだが、失敗を恐れて、過去の成功例を反復する。「映画人たちは、ベストセラーをそのまま下敷きにしないような脚本には、すべて不信の眼を向ける」という。しかし、文化産業から提供されるものが完全に過去と同一のものであることをアドルノらは主張しているのではない。むしろ文化産業は常に目新しいものを提供する。アイデア、目新しさ、そして驚きといったもの、つまり、全くありふれていながらもかつて存在しなかったものが話題になる。常に同じであることと、「かつて存在しなかったもの」が話題になることは矛盾しているように思える。アドルノらの主張は、一見、かつてなかったように見えて、なおかつ、過去のものの反復であるようなものが支配的になっているという意味であろう。過去と同じものを新しいもののように見せるのに役立つのは、「テンポと躍動（動き）」である。「何一つ昔のままに止まっていることは許されない。すべては絶え間なく流れ運動していなければならない。なぜなら機械的生産と再生産のリズムの普遍的勝利だけが、いかなるものも変化せず、規格外の何ものも生じないことを約束するか

らである」。アドルノらはこう指摘する (Horkheimer & Adorno = 徳永 1944 [2004] = 2007 : 142 = 277)。表面的には常に新しいものを提供しつつ、その本質において、文化産業は過去のものの再生産を繰り返しているに過ぎないという指摘であろう。

確かに今日の様々な文化的産物を見ても、過去のものの焼き直しに過ぎないというものはいくらかでも見つかる。しかし、新しいものが過去のものを踏襲しているとしても、その踏襲の中で様々な表現は変化していることは明らかである。アドルノらのように、文化産業が提示するものが過去のものの再生産であるということを強調して、日々変化する側面に着目しないならば、文化産業が持つダイナミズムを理解するような社会理論を提示することはできない。

社会システムは、一定の規則の下にコミュニケーションが連鎖する状況として理解できる。この意味では、何かを社会システムとして捉える見方は本来的に、ものごとを「再生産」という観点から捉える見方に親和的である。しかしその一方で、再生産だけでは、社会は一向に変化しない。実際の社会は日々変化し続け、人々はその変化に翻弄されている。社会理論がそうした社会の動態的側面を捉えられなかったら、それはその社会理論の根本的な欠陥を示すものであろう。アドルノらの議論はこの点において、抜本的な修正が図られるべきである。

社会システムはコミュニケーションの連鎖によって成立するが、ある社会は常に環境の存在を前提としているのであり、その環境の変化に合わせて変化し、時には機能分化といった形で新しい社会システムを生み出す。このため社会システムは、単なる過去の反復ではなく、生成変化していくものである。メディア文化産業の生産に携わる人々のコミュニケーションから構成される社会システムを考えれば、それは絶えず文化産業の生産者やそこで生み出されるコンテンツ、そして消費者等を観察し、そこで有意なものを見出して、自らの社会システム内に取り込んでいく。また、生産者や消費者として括られる人々はそれぞれ孤立して存在しているわけではない。生産者も消費者もまた、多様な社会システムが複合的に構成されたものとして捉えることができる。

アドルノらが、過去の再生産に過ぎないものをあたかも全く新奇なものとして提示しようとする文化産業の特性を捉えて、その背後に、文化産業を駆動する根本原理として、「テンポと躍動（動き）」の存在を指摘したことは、彼らの観察眼の鋭さを証明しているように思う。というのも、社会の秩序を一定の権力機構の存在によって説明するのではなく、その社会の動態的過程そのものの中に、秩序を再生産する見方がここに提示されているからである。このような理解は、社会システム論の理解に適合的である。様々な社会システムの複合的な連鎖によって成立する社会は、社会システムがコミュニケーションの連鎖によって成立するものであるが故に、常に、動態的な過程の中に投げ込まれている。そして、その動態的な過程の中で一定の期間、秩序なるものの存在を見

出すことができるとすれば、それは過去のコミュニケーションの反復によって説明できる。しかし先に述べたように、社会システムは決して単独では存在し得ない。社会システムは本来的に、環境との差異によって生み出され、維持されるものである。社会システムは過去の反復を繰り返そうとしても、環境が変化すれば、過去の反復は常に新しいものを生み出し、その新しいものに基づいた反復は、過去からのズレを生じさせ、社会システムそのものを変容させていく。このようなズレの存在が、社会システムが再生産を繰り返しながら生成変化していくことの理由として考えられる。社会というものは、このような動態的な過程の中で、秩序を維持しつつ、変化し続けていくものとイメージできるであろう。

このような観点に立つとすれば、アドルノらの議論の難点はやはり、文化産業という社会システムの過大評価にあると言えるであろう。文化産業という社会システムがどれほど強力に見えたとしても、それは単独で存在しているわけではない。文化産業という社会システムは環境からの区別として自らを構成し、コミュニケーションの反復の中で自らを維持する。そしてそのような社会システムは、環境の中に存在する様々な社会システムと複合的に絡み合い、影響を与えながら存続していく。

資本主義が競争社会のシステムであるとすれば、生産と流通の社会システムは競争によって特徴づけられている。このため、生産と流通の社会システムは絶えず自らの「環境」を観察し、新しいもの（差異）を生み出すことが必要とされる。生産の社会システムは、自らの生み出したものが流通と消費の社会システムにどのように取り込まれているのかを観察する。流通の社会システムは、流通させたものが生産と消費の社会システムにどのように取り込まれているのかを観察する。こうした観察の中で絶えず生じるズレが、新たなものを生み出す契機となっていると考えることができる。

アドルノらは、資本主義の「テンポと躍動（動き）」に着目し、資本主義的な文化産業の再生産の過程に着目したものの、社会を、様々な社会システムが複合的に組み合わさり、影響し合うものとしてイメージしなかった。このため、資本主義のダイナミズムを十分に捉える議論をできなかった。このことから学ぶべきなのは、再生産を繰り返しながら自らを生成変化させていく運動として、複数の社会システムが複合的に絡み合うメディア文化の過程を捉えようとする視点の重要性であると考ええる。

6. 結 語

本稿では、アドルノらの文化産業論を手がかりにして、社会システム論の観点からメディア文化産業を分析する際の分析枠組みについての基本的な考え方を提示した。

アドルノらの議論については今日でも、メディア社会学などの観点から議論されてい

る。しかし、文化産業が文化的製品（作品、コンテンツ）と、そしてそれを享受する消費者に画一性を押し付けることを強調したアドルノらの議論が今日においては時代遅れなものとなっていることには疑いがない。文化産業が何を提供しようとも、消費者がそれを画一的に解釈するという主張はおよそ受け入れることができない。アドルノらの議論は、もともと文化が混とん状態にあるかのように見えるほど多元化する中で進行する画一化の傾向を指摘しようとしたものであった。アドルノらの議論を現代社会の分析に生かそうとするならば、アドルノを別様に解釈し直して今日的な意義を取って読み込もうとするのではなく、むしろ、彼らがどこで間違ったのかを検討した方が生産的であろう。

本稿では、上記のような問題意識を持って検討してきた。そして、アドルノらの議論に代えて筆者が依拠したのがルーマンの社会システム論である。社会システム論の基本的な発想からアドルノらの議論を読み返してみると、アドルノらの議論が過度に文化産業の持つ「画一性」への指向を強調してしまったのは、社会を、複数の社会システムが複合的に組み合わさったものとして見る観点が欠如していたからであるといえる。あるいは、社会が本来的に複数の社会システムが複合的に組み合わさったものであると捉えた場合、メディア文化における流通過程の社会システムの論理が、他の社会システムの論理に完全に浸透し、支配しているかのように捉えていることに難点がある。アドルノらは、資本主義的な文化産業が、既存のものの「再生産」によってその秩序を構築するという発想を持ちながらも、その過程を動態的に捉えることができなかったため、文化産業が生み出す変化や多様性の側面を無視するに至った。

本稿では以上のようなことを論じてきた。ルーマンの社会システム論は難解であり抽象的であるため、それを生かして実際の社会分析に応用できるような形の理論枠組みを提示するのは容易ではない。本稿は、社会システム論に依拠したいくつかの発想をもとにしてアドルノらの議論を批判的に検討することを通じて、メディア文化や文化産業を分析するための分析枠組みの基本的考え方を提示しようとする試みであった。筆者はここで述べたような社会システム論の発想に立ってメディア文化を分析することで、社会の在り方について示唆に富んだ知見を得ることができると考えているが、これについては具体的事象の分析に加えて、更なる理論研究も必要となる。これらについては別稿で論じたい。

引用文献

- Adorno, Theodor W. (1962) *Einleitung in die Musiksoziologie*, Shrkamp Verlag (= 1999, 高辻知義・渡辺健訳『音楽社会学序説』平凡社。)
- Bruce, Steve & Steven Yearley (2006) *The Sage Dictionary of Sociology*, Sage Publications
- Callinicos, Alex (2007) *Social Theory: A Historical Introduction (2nd. Edition)*, Polity.

- Fiske, John (1989 [2011]) *Reading the Popular* (2nd edition), Routledge (=1998, 山本雄二訳『抵抗の快楽：ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社。)
- Hall, Stuart (1980) "Encoding/decoding" in Stuart Hall, Dorothy Hobson, Andrew Lowe and Paul Willis (eds.) *Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-1979*, Unwin Hyman: 128-138.
- Horkheimer, Max & Theodor W. Adorno (1944 [2004]) *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente* (15. Auflage), Fischer (=2011, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店。)
- 細身和之 (1996) 『アドルノ：非同一性の哲学』講談社。
- 伊藤高史 (2018) 「社会学的ジャーナリズム研究の再検討：ニクラス・ルーマンの社会システム論からの考察」『法学研究』91(6): 29-52。
- 伊藤高史 (2019) 「インターネット・SNS 時代の「マス・コミュニケーションの全面化」に関する考察：メディア社会学と社会システム論の観点から」『評論・社会科学』131: 1-21。
- 片上平二郎 (2018) 「楽しいアドルノ：「文化産業論」における「娯楽」と「技術」の可能性」『応用社会学研究』60: 123-133
- Luhmann, Niklas (1987 [2015]) *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp (=佐藤勉監訳, 1993, 『社会システム理論 (上)』恒星社厚生閣。)
- 毛利嘉孝 (2012) 『増補ポピュラー音楽と資本主義』せりか書房。
- 小川博司 (2016) 「反ノリの理論家としてのアドルノ：ノリの社会学に向けて」『関西大学社会学部紀要』47: 1-18。
- 岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』中央公論新社

Consideration of an Analytical Framework for Media Culture Based on the Social System Theory through the Examination of Theodore Adorno's Arguments about "Culture Industry"

Takashi Ito

This study aims to consider an analytical framework to analyze today's media culture based on the Social System Theory presented by well-known German sociologist Niklas Luhman through the examination of the classical theory of "Culture Industry" by German philosopher Theodore Adorno. In 1944, Adorno used the word "Culture Industry" in his famous work "*Dialectic of Enlightenment*," coauthored by Max Horkheimer, to criticize the contemporary tendency that every cultural product was produced as a commodity in a standardized way and that each individual was subjected to the force of capitalism and existing order. Although his arguments, which were based on Marxism, sound outdated today, quite a few sociologists are still attracted by his arguments, even in modern-day Japan. The author examines Adorno's arguments and suggests that he overestimated the power of the culture industry, because he argued that the system of economy encompassing the culture industry based on capitalism is a unique social system dominating the entire society. The social system theory suggests that a society is composed of a complex combination of social systems, each of which is autonomous while being influenced by the others. A critical examination of Adorno's arguments from the viewpoints of the social system theory suggests that a tug of war between different social systems as well as the "structural coupling" between them is the main focus to be analyzed.

Key words : Culture industry, Media sociology, Media culture, Social system